様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 １７ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2011～2015
課題番号：２３５２０３０３

研究課題名（和文）アンドリュー・マーヴェル研究―人間関係と表現技術―

研究課題名（英文）A Study of Andrew Marvell: Human Relationships and Expression Techniques

研究代表者
吉中　孝志（Yoshinaka, Takashi）

広島大学・文学研究科・教授

研究者番号：３０２３０７７５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　庭が、超党派的、脱イデオロギー的な人間関係を紡ぎだす媒介的な空間と成り得た可能性を精査する過程でイギリスの1640～50年代の長老派と独立派との間の共謀、敵対関係、そして「法王教」との確執が、マーヴェルとジョン・ホールとの表面上の友人関係を変容させていることが判明した。この研究成果は、Notes and Queries において発表された。
　また、マーヴェルとフェアファックス卿との人間関係が、一方にバッキンガム公爵を介した王党派の人脈、他方にクロムウェルやミルトンのような議会派の人脈との間で微妙なバランスを保っていたことが知見として得られた。この研究成果は17世紀英文学会の論集で発表された。

研究成果の概要（英文）：The research has found that the religious and political situations in mid-seventeenth-century England, especially the military alliance and the bitter discord between Independents and Presbyterians in the 1640s and 1650s, radically changed human relationships between Andrew Marvell and John Hall. Marvell's text reveals that he was trying to maintain their friendship by using a subtle and humourous turn of expression in his poetry.
Also, the research succeeded in broadening the reader's view on the ideologically complex situation in which Marvell was writing 'Upon Appleton House'. Marvell was trying to preserve a delicate balance between George Villiers, Second Duke of Buckingham and the Royalists on the one hand and Parliamentarians such as Cromwell and Milton on the other. The publications of these findings appeared in Notes and Queries, NS., vol. 61, no. 3 (2014), pp. 369-371 and my article in Historicist Readings of 17th-Century English Literature (2015), pp. 183-210.

研究分野：イギリス文学

キーワード：アンドリュー・マーヴェル

１．研究開始当初の背景

(1) 21 世紀に入ってマーヴェル研究は、そのテクスト環境が大きく整備された。*The Prose Works,* ed. Annabel Patterson, et al., 2 vols. (New Haven, 2003) および、*The Poems of Andrew Marvell*, ed. Nigel Smith (Harlow, revised edn. 2007) による貢献である。また、最新の伝記資料としては、Nicholas von Maltzahn, *An Andrew Marvell Chronology* (Basingstoke, 2005)、及び Nigel Smith, *Andrew Marvell: The Chameleon* (New Haven, 2010) が提供された。これらの知見によって今まで知られていなかったマーヴェルの人脈と文学作品との関係が明らかにされる準備が整ったと言える。

(2) また、Nicholas McDowell, *Poetry and Allegiance in the English Civil Wars: Marvell and the Cause of Wit* (Oxford, 2008) が明らかにした 1640 年代のマーヴェルと Thomas Stanley (1625-78) らとの関係は、マーヴェルの作品が持つ両義性の理由を解明するために大きな鍵を提供してくれた。研究開始当初において、マーヴェル研究の中心は、このマーヴェルの人脈解明と作品解釈との関係にあるべきであると考えられた。

２．研究の目的

(1)「腹話術」的と評されることさえある Andrew Marvell (1621-78) のテクストは、それが生成された時点での彼と彼を取り巻く他者との複雑な人間関係が織り成したものだといえる。本研究の目的は、１７世紀英国の政治、宗教的な激動の時代の中枢に生きたマーヴェルの交友関係と敵対関係を、それぞれの作品制作時点での相関図として纏め、彼の人脈がどのようにテクストに影響を与え、またテクストがどのように人間関係を形成する働きをしていたかを明らかにすることである。極めて専門的な研究成果の副産物として、言葉を操る人間が、敵と味方との間を如何に生きてゆくべきか、言葉によってどのように人間関係をうまく生きることができるかの知見を得る。

(2) 研究開始当初は、マーヴェルの人間関係に関する調査を John Hall、 William Davenant、the Lord Wharton の３人に限定し、マーヴェルとの関係を中心に据えた上で、放射線状の他の人物との相関図を構築し、マーヴェルの特定のテクストとの相互影響関係を考察することを目的とした。

３．研究の方法

(1) 国会図書館関西館において Early English Books on Line を用いて資料閲覧を行うと共に、英国ハル歴史センター (Hull History Centre) に海外出張を行い、the Racovian Catechism の翻訳を含む MS ‘Sermons &c of the Rev. Andrew Marvell’ を閲覧調査する。

(2) John Hall に関する調査資料は以下のとおりで、読解に多くの時間をかけ、マーヴェル作品との間テクスト性を探りつつ、ホールを中心とする人脈を整理する。*Horae Vacivae* (Cambridge, 1646); *Poems* (1646/7); *A True Account and Character of the Times* (1647); *An Answer to the Scots Declaration* (1648); *The Advancement of Learning* (1649); *A Serious Epistle to Mr William Prynne* (1649); *The Declaration and Speech of Colonel Massey* (1650); *Paradoxes* (1650); *The Grounds and Reasons of Monarchy Considered* (1651); *A Gagg to Love’s Advocate* (1651); *A Letter Written to A Gentleman in the Country* (1653); *Confusion Confound* (1654); *Emblems with Elegant Figures* (1658)

４．研究成果

(1)アンドリュー・マーヴェルをめぐる人間関係を明らかにするという目的を持つ本研究の第一段階は、彼の代表作の一つである「庭」（‘The Garden’）を再考することから始めた。「馥郁たる孤独」（‘delicious solitude’, line 15）を味わうための庭空間は、逆説的ではあるが、実は良好な人間関係を醸成するための、ある意味で現実世界を超越した、「狭間」、もしくは「広場」としての性質をも有していたという仮説を構築することができた。英国 17 世紀の庭が、例えば、ジョン・イーヴリン (John Evelyn, 1620-1706) の庭に代表されるような、超党派的、脱イデオロギー的な人間関係を紡ぎだす、媒介的な空間と成り得た可能性である。この庭園概念を土台としてマーヴェルの人間関係における具体的な個人、特にフェアファックス卿 (Thomas Fairfax, 3rd Lord Fairfax of Cameron, 1612-1671)、およびウォートン卿 (the Lord Wharton, 1613-1696) との関係をさらに精査していくことが今後の課題となった。平成 23 年度は、イギリス・ガーデン研究会、17 世紀英文学会において「マーヴェルの庭と 17 世紀の庭」を、平成 24 年度には 17 世紀英文学会において「マーヴェルのメロン」と題した口頭発表を行った。これは、17 世紀の英国の、そしてヨーロッパ、特にイタリアの庭空間における特徴的な要素であるオウィディウスの『変身譚』と彫像、トピアリー、機械仕掛けの噴水、果樹園での栽培技術、メロンの栽培と女性との関係、メロンの性的な薬効に関する歴史学的調査をイタリア現地において行うとともに Early English Books on Line を用いて国会図書館において行った成果である。ルネサンス期の庭のうち、ヴィッラ・デステとヴィッラ・アルドブランディーニの庭にマーヴェルの詩的イメージの材源となった可能性のある彫像、および壁画を発見した。また、調査の結果、判明した 17 世紀におけるメロン栽培の実際は、マーヴェルの「庭」の位置がブリテン島の南部にあったと想定する現在支配的

な学説、および「庭」の制作年代を王政復古後とする新規の学説を覆す有力な一つの根拠となりうる知見へとつながった。これらは、平成 24 年度から 26 年度にかけて『広島大学文学研究科論集』、『英語英文學研究』において発表した。また、マーヴェルのセクシュアリティーの問題に関しては、平成 26 年度の日本英文学会全国大会の招待発表において口頭による発表を行った。

(2)庭が、人間関係を醸成する場所としての性質を普遍的、哲学的な特質として有していることを実証するため、連合王国において近年、ナショナル・トラスト等の団体によって盛んに再現されることの多くなった 19 世紀の庭を実地調査した。特に 18 世紀終わりから 19 世紀初めにかけての最も充実した資料を残すウィリアム・ワーズワス（William Wordsworth, 1770-1850）の庭をテクストと湖水地方に復元された庭の両面から調査することを開始し、未発表ではあるが「場所としてのワーズワスの庭」、「ワーズワスの庭と所有の不安」という二つの論考に結実した。前者の論考には、英国レスターシャー、コロートン（Coleorton）において、その一部が残るワーズワスの作庭したウインターガーデンを現地調査した成果が含まれている。ワーズワス家族とジョージ・ボーモント（Sir George Beaumont, 1753-1827）夫妻との交わりだけではなく、ウォルター・スコット（Sir Water Scott, 1771-1832）のような他の作家たちとの接点を作り出した場所である。調査結果の一つとして先行研究の Carol and Richard Buchanan, *Wordsworth's Garden* (2001) が「スコットの座席」とグロットを取り違えていることを発見し、「広島日英協会会報」108 号において公表した。また、後者の論文の一部は、中国四国イギリスロマン派学会において口頭発表した。

(3) 平成 25 年度には、英国 Hull History Centre において、マーヴェルの、聖職者であった父親の手稿（MS. Sermons etc. of the Rev. Andrew Marvell）を閲覧調査し、父マーヴェルが子マーヴェルの表現方法にどのような影響を与えたかを探った。厳しい処罰を是とする厳格な規律保守の教育方針が、マーヴェル後半生の、英国国教会聖職者に対する敵愾心へと繋がり、マーヴェルの政治的、宗教的散文作品に見られる痛烈な風刺的表現へと結実しているという知見を得た。また、マーヴェルの学術的伝記として現在最も権威のある Nigel Smith, *Andrew Marvell: The Chameleon* (New Haven, 2010) が引用しているマーヴェル・シニアの手稿には、原文と比べると脱落している箇所があることを発見した。さらに、同手稿に含まれている the Racovian Catechism の翻訳に関しては、その教義的意義を含めて今後の研究課題となった。

(4) マーヴェルの文学的表現に影響を及ぼした具体的な人間関係のうち、本研究の実績として最も特筆できるのは、John Hall に関する成果である。上記 3.(2)で計画した John Hall に関わる文献はその精査を全て完了した。その結果得られた知見から議論できることの一つは、イギリスの 1640 年代、1650 年代の政治的、宗教的観点から、長老派と独立派との間の内乱時における共謀関係と内乱後の敵対関係、そして清教徒と「法王教」との確執が、マーヴェルとホールとの表面上の友人関係を変容させていく過程を読み取ることができるということである。この研究成果は、国際学術雑誌である *Notes and Queries* において平成 26 年 9 月に発表された。

(5) マーヴェルと同時代の詩人であるヘンリー・ヴォーン（Henry Vaughan, 1622-1695）との間テクスト性に関しては、ナイジェル・スミスやポール・ハモンド等の研究者によって指摘されていたが、思想的な接点は未考察のままであった。ヴォーンの錬金術的表現を分析する過程で、マーヴェルをめぐる人間関係の中で当初の研究計画では想定していなかった人物が浮上してきた。第二代バッキンガム公爵（George Villiers, Second Duke of Buckingham, 1628-1687）である。マーヴェルとヴォーンとが個人的な人間関係を持っていたということはまだその証拠を得ていないが、少なくとも彼らの思想的なつながりの一つが、ヘルメス哲学であることは本研究の成果として証明可能となった。マーヴェルがフェアファックス卿の所領に滞在していた際に書かれたテクストにヘルメス哲学の影響を色濃く受けた表現が見出されるからである。特に終末論的な表現が錬金術的な表現と重ねられている部分があり、その箇所が示唆するのは 17 世紀後半に錬金術的「ガラス化」を化学産業として利用した第二代バッキンガム公爵の存在である。彼とチャールズ二世との関係を考えると、17 世紀中葉においてマーヴェルとフェアファックス卿との人間関係が、一方にバッキンガム公爵、そして後の国王を中心とする王党派の人脈、他方にオリヴァー・クロムウェル（Oliver Cromwell, 1599-1658）やジョン・ミルトン（John Milton, 1608-1674）のような議会派の人脈との間で微妙なバランスを保っていたことが知見として得られた。この研究成果は 17 世紀英文学会、平成 27 年出版の論集で発表された。

＜引用文献＞

The Poems of Andrew Marvell, ed. Nigel Smith revised edition (Harlow: Pearson Education Ltd., 2007)

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）

① 吉中　孝志、花を見つめる詩人たち―ヴォーンとワーズワス―、査読有、『英語英文學研究』（広島大学英文学会）第 60 巻、2016、1-22
② 吉中　孝志、終末の錬金術―マーヴェルとヴォーン―、『十七世紀英文学を歴史的に読む』(十七世紀英文学会編)、査読有、2015、183-210

③ 吉中　孝志、マーヴェルの「庭」と 17 世紀の庭（後編）、『広島大学大学院文学研究科論集』、査読無、第 74 巻、2014　33-44

④ Takashi YOSHINAKA, Two Verbal Echoes of John Hall in Marvell's Verse, *Notes and Queries, New Series*, 査読有、vol. 61, no. 3, 2014, 369-371.

⑤ Takashi YOSHINAKA, Marvell's Melon, *Hiroshima Studies in English Language and Literature*, 査読有、No. 58, 2014, 1-9.

⑥ 吉中　孝志、マーヴェルの「庭」と 17 世紀の庭（中編）、『広島大学大学院文学研究科論集』、査読無、第 73 巻、2013、15-33

⑦ 吉中　孝志、マーヴェルの「庭」と 17 世紀の庭（前編）、『広島大学大学院文学研究科論集』、査読無、第 72 巻、2012、103-116

〔学会発表〕（計６件）
① 吉中　孝志、花を見つめる詩人たち―ヴォーンとワーズワス―、イギリス・ロマン派学会全国大会、2015 年 10 月 17 日、奈良教育大学

② 吉中　孝志、庭のセクシュアリティー―マーヴェルは、なぜ耕さないのか？―、日本英文学会全国大会、2014 年 5 月 25 日、北海道大学

③ 吉中　孝志、ワーズワスの庭と所有の不安、中国四国ロマン派学会、2013 年 6 月 1 日、ＫＫＲ広島

④ 吉中　孝志、マーヴェルのメロン、十七世紀英文学会全国大会、2012 年 5 月 25 日、立正大学

⑤ 吉中　孝志、マーヴェルの「庭」と 17 世紀の庭（拡大版）、十七世紀英文学会関西支部例会、2011 年 12 月 10 日、大阪ＹＭＣＡ

⑥ 吉中　孝志、17 世紀の庭とマーヴェルの「庭」、イギリス・ガーデン研究会、 2011 年 9 月 5 日、兵庫県立大学

６．研究組織
(1)研究代表者
吉中　孝志　（YOSHINAKA TAKASHI）
広島大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：３０２３０７７５